

「誰ひとり取り残されないまちづくり ～フルインクルージョンをめざして～」

(玉木幸則さん 2025 年 12 月 4 日)

1 人権週間と障害者週間から始めよう

きょうは、人権週間の前日なんです。

12 月 4 日からが人権週間で、その前日の 12 月 3 日からは障害者週間。

きれいに“かぶってる”んですね。

人権も、障害の問題も、本当は切り離せないはずなのに、

なぜかカレンダー上は別々の「週間」になっている。

だったら、いっそのこと「12 月まるごと人権月間にしたらええのにな」と、ぼくは思っています。

きょうの目標は、ひとつだけです。

「ぼくの声が、ちゃんと皆さんに聞こえるようになること(笑)」

<人権週間と障害者週間が重なっているのに、制度上は別枠になっているところに、「人権」と「障害」を分けて扱ってきた社会の感覚がよく出ています。」「12 月まるごと人権月間に」という一言で、重い話題に入る前に、私たちの前提を少しずらしておられました。>

2 梅田の地下街で舌打ちされるということ

ぼくは、車いすで移動しています。

梅田の地下街なんかを走っていると、

最近みんなスマホを見ながら歩いてるでしょう。

イヤホンして、音楽聴いたり動画見たりしながらね。

そうすると、まっすぐこっちに向かって歩いてくる。

でも、ぼくの姿には気づいていない。

で、ぶつかりそうになって、ギリギリで避ける。

そのときに、どうなるか。

けっこうな確率で、ぼくのほうを見て「チッ」って舌打ちされるんです。

でも、あの「チッ」という一音に、

この社会が何を“当たり前”としているかが、すごくよく表れている気がします。

<梅田での舌打ちの場面は、「通路はみんなのもの」ではなく「健常者が基準で、車いすは邪魔」という前提が、そのまま音になった出来事だと思います。日常のごく短い一瞬に、排除のまなざしがどれだけ濃く詰まっているかがよく分かる話でした。>

3 「誰ひとり取り残さない」から「誰ひとり取り残さ『れ』ない」へ

最近、「誰ひとり取り残さない社会を」とよく言われます。

悪いスローガンではないんですけど、ぼくは少し引がかかることがあります。

「取り残さない」と言うとな、

“取り残される側”と“取り残さない側”に分かれてしまう。

後者が、前者を「助けてあげる」「救ってあげる」という構図になりやすいんです。

でも、本当は、ぼく自身もふくめて、

「誰ひとり取り残されない」社会をめざしたい。

いつ、誰が、どのタイミングで“取り残される側”になるか分からないからこそ、

そこに線は引けないんですよ。

<「誰ひとり取り残さない」という表現には、「助ける側／助けられる側」の上下関係が入り込みやすいという指摘が印象に残ります。「取り残されない」と言い換えることで、誰もが当事者になりうる前提から、相互の支え合いとして関係を考え直そうとしておられるのだと感じました。>

4 バラエティとダイバーシティはほぼ同じ意味

ぼくはNHKのEテレに16年間出ていました。

「きらっといきる」という番組のあと、「バリバラ」に出演していました。

「バリバラ」は「情報バラエティ番組」と紹介されることが多いんですけど、

そもそも「バラエティ」って何やろう、と思ったんです。

チロルチョコの詰め合わせを思い出してください。

袋に「バラエティパック」って書いてありますよね。

いろんな味、いろんな形のチョコがごちゃっと混ざっている。

つまり「バラエティ」とは、「変化がある」「いろいろ混ざっている」状態。

実はこれ、ダイバーシティ（多様性）とほぼ同じ意味なんです。

「バリバラ」には、「生きづらさを抱えるすべてのマイノリティ」という副題も付いていました。

障害のある人、高齢者、日本で暮らす外国人、ひとり親家庭、LGBTQ……。

いろんな“少数派”が登場します。

<チロルチョコの「バラエティパック」の話から、多様性は特別なスローガンではなく、「いろいろ混ざっている」という日常の姿そのものだと改めて思いました。「バリバラ」に登場するマイノリティのエピソードも、誰か一部の問題ではなく、この社会の「生きづらさ」を映すものとして受け止められます。>

5 マイノリティとは誰のことか

「マイノリティ」と聞くと、
どうしても「自分とは違う、どこか特別な人たち」と考えがちです。
たとえば、障害のある人。
お年寄り。
日本で暮らしている外国の人。
ひとり親家庭。
LGBTQ の人たち……。
でもね、ちょっと“わり方”を変えると、皆さんもすぐマイノリティになれます。
日本の中の大阪府民。
その中の大阪市民。
その中の北区。
その中の北稜中学校関係者。
そして、きょうのこの時間に、この講演を聞きに来ている人たち。
こうやって条件を重ねていったら、
皆さんは「超マイノリティ」になります。
おめでとうございます（笑）。
つまり、マジョリティかマイノリティかなんていうのは、
枠の切り取り方で、いくらでも入れ替わるんです。
それから、ぼくの知り合いには「障害があり、トランスジェンダーでもある」という人がいます。
日本では、障害のある人への介助は「同性介助」が基本です。
でも、その「同性」はたいてい、戸籍上の性別で決められる。
当事者の性自認とはズレている場合もあって、それがしんどさにつながることもあります。
皆さんの子どもや孫が、トランスジェンダーとして生まれてくるかもしれない。
そんな可能性を少しでも想像してみることに。
それが、「自分には関係ない世界」を、「自分ごと」にしていく第一歩だと、ぼくは思っています。

<条件を細かく区切っていけば、自分たちも簡単に「超マイノリティ」になる、という整理は、多数派と少数派が固定された立場ではないことを端的に言い表していると思います。障害とトランスジェンダーが重なる例から、制度が前提としている「ふつう」の枠組みが、当事者を重ねて追い込んでしまう現実も見えてきました。>

6 「人はみんないっしょ」の罪深さ

大人はよく、子どもにこう言います。

「人はみんないっしょやねんで」と。

一見、ええ話のように聞こえるでしょ。

でも、ぼくはこれは、ちょっと罪深いと思っています。

ぼくが大人の人に、「ぼくとあなたの違うところってどこでしょう？」と聞くと、
だいたい返ってくるのは「いやあ、ほとんど一緒ですよ」です。

心の中で「嘘つけ」と思います（笑）。

見た目も、歩き方も、生きてきた環境も、考え方も、全然違うはずなのにね。

ところが、小さな子どもたちに同じ質問をすると、反応はまったく違います。

「背の高さが違う」「歩き方が違う」「しゃべり方が違う」……。

次々と、いろんな違いが出てきます。

じゃあ逆に、「ぼくと君たちの同じところは？」と聞いてみる。

すると、子どもたちは大きな声で「にんげん！」と言ってくれるんです。

ぼく、この感覚が大好きなんです。

違いはちゃんとある。

でも、そのうえで「同じ人間だよ」と言える。

本当は、この順番が大事なんじゃないでしょうか。

ところが、小学校に上がるとどうなるか。

制服も、上履きも、教科書も、ランドセルも、「みんな一緒」にそろえられていく。

「みんな違っていい」ではなく、「みんな一緒であるべき」というメッセージが、
毎日の生活の中にしみこんでいきます。

もし学校で、「人はみんな違う」ということを、ちゃんと教えてくれていたら。

ぼくは、もう少し生きやすかったかもしれない。

梅田の地下街で舌打ちされることも、少しは減っていたかもしれない。

そんなふうに思うことがあります。

<子どもたちが違いを素直に挙げたうえで、最後に「にんげん」と共通点を言う流れは、「違いを認めたうえで
の同じ」というインクルージョンの基本形だと感じます。一方で、学校文化は「みんな同じ」であることを強く求
めがちで、その延長線上に梅田での舌打ちもあるのではないかと考えさせられました。>

7 「分かったつもり」にならない車いす体験

小学校なんかで、「車いす体験」が行われることがあります。

ぼくもそれ自体は、まったく否定しません。

むしろ、やり方次第ではとても大事な学びになります。

でも、体験のあとに子どもたちに書かせる感想で、

「車いすに乗っている人の気持ちが分かりました」という文章を見ると、

ぼくは「本当にそうかな？」と思ってしまいます。

5分、10分乗っただけで、“分かる”でしょうか。

毎日、ずっと車いすで生活している人のしんどさや、悔しさや、楽しさまで。

本当に分かるわけがない、とぼくは思います。

むしろ正直な感想は、

「車いすに5分乗ってみたけれど、車いすを使っている人の気持ちは分からなかった。

だから、これからどうかかわればいいのか、考え続けたい」

というものじゃないでしょうか。

大切なのは、「分かったつもり」で終わらないこと。

「分からないから、聞いてみよう」「一緒に考えてみよう」と動き続けること。

そのほうがよっぽどインクルーシブな学びになると、ぼくは思っています。

<車いす体験そのものではなく、その後に「気持ちが分かりました」と書いてしまう構図への違和感が、よく伝わってきました。「分からなかった」と認めたくえて、聞き続け・考え続ける姿勢こそが、当事者との対話をひらくインクルーシブな学びの出発点だと感じます。>

8 本当の「障害」はどこにあるのか

きょう、ぜひ持ち帰ってほしい言葉があります。

「生きづらさをつくっている人の意識（こころ）の中にこそ、

本当の『障害』が潜んでいる。」

多くの場合、「障害」は本人の体や心の中にある「欠陥」のように語られます。

でも、ぼくはそうは考えていません。

段差だらけの駅、情報が届きにくい仕組み、

「こうあるべきだ」という価値観を押しつける目線。

そういうものが組み合わさって、「生きづらさ」をつくっている。

だから、「障害」は社会の側、人々の心の中にもあるんです。

<「生きづらさをつくっている人の意識の中にこそ、本当の『障害』が潜んでいる」という一文は、障害を個人の問題から社会の側の問題へと視点を切り替える言葉だと受け止めました。段差だらけの環境や価値観の押しつけといった外側の条件も含めて考える必要があることを、平易な表現で丁寧に語っておられたと思います。>

9 ことばをやわらげるだけで、何が変わるのか

「障害」という漢字表記を、「障がい」「しょうがい」に変えよう、という動きがあります。ことばをやわらかくしたい、という気持ちは分かりますし、それが必要な場面もあると思います。

でも、漢字をひらがなに変えただけで、本当に障害がなくなるのか。

そこは、一度立ち止まって考えたいところです。

場合によっては、当事者の声をじゅうぶん聞かないまま、

「やさしさの押し売り」になってしまっていないか。

「こうしてあげたほうがいい」という、支援する側の都合だけが前に出ていないか。

これはパターンリズム——上から目線の温情——につながっていきます。

「障碍」という表記も使われることがあります。

「碍（がい）」という字は、ふだんほとんど使いませんが、「妨げる」という意味を持っています。

仏教用語の「障碍（しょうげ）」など、もともとネガティブな意味合いで用いられる言葉でもあります。

文字だけを取り替えて安心するのではなく、

そのことばの背景にある価値観や、社会の仕組みそのものを問い直す必要がある——。

ぼくはそう考えています。

<表記を「障害／障がい／しょうがい／障碍」と変えること自体よりも、その背景にある価値観や決め方のプロセスを問う必要がある、という視点が印象的でした。当事者の声を置き去りにした「やさしさ」は、パターンリズムになりかねないという指摘は、私たちの側の安心感そのものも問い直すものだと感じます。>

10 施設で過ごした子ども時代と優生思想

ここで、少し自分の生い立ちの話をします。

ぼくは4歳のときから、小学校に入るまで、親元を離れて施設で暮らしていました。

家族と一緒に生活する、という当たり前の経験が、ぼくの幼いころにはなかった。

やっぱり、寂しかったですよ。

その間に、何度か手術も受けました。

本当は「ありのまま」でいいはずの身体を、

少しでも障害のない人に近づけるための手術でした。

これは、優生思想と深く結びついています。

「こういう体のほうがいい」「こういう子どものほうが望ましい」という基準があって、そこから外れている身体を「矯正」しようとする考え方です。

家族や地域から切り離された暮らし。

幼いころから、「家で家族と一緒に暮らす」というごく普通の時間が奪われていたこと。

その背景には、「幸せのかたち」を本人以外が決めてしまう構造があります。

「幸せって、誰が決めるのか？」

この質問は、ぼく自身にも、そして社会全体にも投げかけたい問いです。

<幼少期を施設で過ごし、「少しでも健常に近づけるための手術」を受けてきた経験から、「幸せのかたちを誰が決めるのか」という問いが、非常に具体的な重みをもって伝わってきました。医療や福祉だけでなく、子どもたちと向き合う教育の場での支援の在り方も、同じ問いにさらされていると感じます。>

11 フルインクルージョンと日本の教育の現実

今、日本では子どもの数が減ってきています。

その中で、いわゆる「普通学校」は統廃合や廃校が進んでいる。

一方で、特別支援学校は増えているんです。

30年前には、一般にはあまり知られていなかった「発達障害」という言葉が、

今ではよく耳にするようになりました。

それ自体は、必要な支援につながりやすくなるという良い面もあります。

でも同時に、「この子は特別な場所で学ぶべきだ」と分けてしまう流れも強くなっている。

「分けること」が、そのまま「守ること」だと勘違いしてしまう危険もあります。

そこで、ぼくが大事にしたいのが「フルインクルージョン」という考え方です。

フルインクルージョンとは、

- ・安易に「分けない」こと
- ・違いを理由に「排除しない」こと
- ・どの子にも、どの人にも、「平等な選択肢」が用意されていること

つまり、「ともに生きていくこと」を最初から前提にして、

学校や地域や社会の仕組みを組み立てていく、という発想です。

「特別支援教育」という言葉は、日本独自の表現です。

世界では「特別なニーズ教育（special needs education）」という言い方が一般的で、

子どもの側のニーズに合わせて環境を整える、という考え方が中心にあります。

日本ではどうしても、「特別支援してあげる側」の視点が前に出がちです。

国連からも、「日本は人権が危ない国やで」といろいろ指摘されています。

だからこそ、「分けない・排除しない・選べる」というフルインクルージョンの視点を、

もう一度、教育現場から問い直したいと思っています。

<子どもの数が減って「普通学校」が減る一方で、特別支援学校が増えている状況は、「分けること＝守ること」と考えてしまう流れの強さをよく表しているように思います。「分けない・排除しない・選べる」というフルインクルージョンの三つの視点は、日本独自の「特別支援教育」のあり方を見直すうえで有効な手がかりになると感じました。>

12 「共生」よりも「協働」へ

日本では、「共生社会」という言葉がよく使われます。

もちろん、それ自体がダメなわけではありません。

ただ、「共生」というのはもともと生物学の用語なんですね。

広い意味では、「寄生」もふくまれてしまう。

片方だけが得をして、もう片方が損をする関係も、「共生」と呼ばれてしまうことがある。

ぼくが人間社会に対して使いたいのは、むしろ「協働」という言葉です。

いろんな立場の人が、それぞれ違う力を持ち寄って、一緒に社会をつくっていく。

意見が合わないからといって、「じゃあ、出て行ってくれ」と排除するのではなく、

「どうすれば一緒にやっていけるか」を探していく。

「いろんな人がいる」という前提に立って、

そのうえで「排除しない」こと。

それが、ぼくの考える「協働する社会」です。

<「共生」という言葉には、対等でない関係まで含まれてしまうという説明を聞き、「協働」という言い方を選ぶ理由がよく分かりました。意見の違いがあっても排除ではなく、「どう一緒にやっていくか」を考え続ける関係を前提にすることが、インクルーシブな社会像として語られていたように思います。>

13 優生思想と向き合うために——「生きているだけでえらい」

相模原障害者殺傷事件の話も、避けて通ることはできません。

あの事件を、「一人の異常な人が起こした特殊な出来事」だと片づけてしまうのは簡単です。でも、その背景には、「役に立たない命は、生きている意味がない」という優生思想があります。

「生産性がない人はどうなのか」

「社会の役に立っていない人はどうなのか」

もし、そんな物差しで人の価値を測り始めたら、

ぼくらのほとんどは、どこかのタイミングで「役立たず」の側に追いやられます。

ここにいる皆さんも、例外ではありません。

だからこそ、ぼくはこう言いたいんです。

「生きているだけでえらい。」

働けるかどうか。

稼げるかどうか。

人の役に立っているかどうか。

そういう条件を全部取っ払ったところに、

人のいのちの価値がある。

きょう、この言葉だけでも持って帰ってもらえたらうれしいです。

そして、子どもたちにも、周りの大人たちにも、

少しずつでいいので、広げてもらえたらと思っています。

<相模原事件を、「一人の異常者の事件」で終わらせず、「役に立たない命はいらない」という優生思想の問題として語られたことが、とても重く響きました。その物差しを使えば、私たちもいつか「役立たず」にされてしまうかもしれません。最後に掲げられる「生きているだけでえらい」というメッセージは、能力主義と優生思想への力強いアンチテーゼであり、講演全体を貫くテーマの結晶と言えます。>